

文化 第81巻 第1・2号 一春・夏一 別刷
平成29年9月25日発行

語構成と節構成の関わりからみた字音形式 「式・風」

曾 睿

語構成と節構成の関わりからみた字音形式「式・風」

曾 睿

1 はじめに

字音形態素は語の一部となるのが基本であるが、単独で自立することができない字音形態素は語基として認められにくく、接辞として扱われることも多く見られる。語構成は素材的なもの（形態素）から成り立つ過程であり、語構成を経由して初めて語になり、節構成に参加するのが本来の流れであるが、単独で自立することができず、接辞として扱われることが多い字音形態素が、直接、節構成に参加する現象がしばしば見られる。

本稿は、単独で自立できないが、語構成と節構成両方に参加できる字音形式「式・風」を取り上げ、字音形態素としてのあり方（語構成における役割）が節の一部としてのあり方（節構成における役割）にどのような影響を与えているのかについて考察し、そういった字音形式の有する特徴を明確にすることを目的とする。

2 先行研究と問題のあり方

2.1 字音形態素としての「式・風」について

「式・風」は複合語では基本的に後項として使われる（和式（和風）・日本式（日本風））。ただし、「式・風」の語構成における用法に関する考察は複合語における意味と機能そのものではなく、複合語の前項（どのようなものにつくのか）と複合語自体（どのような語、あるいは語の一部として使われるか）に注目することが多い。

荒川（1986）は、「二字漢語の要素になる「性」「式」「風」は語基で、二字漢語や外来語につく「性」「式」「風」は接辞とされているが、意味的にはかわるところがないし、文法的にもにかよったものが多い」という。また、荒川（1986）は「式」の中で、「卒業式」や「方程式」の「式」とは違い、「英国式」の「式」は主に相言類（「の・な」を伴い、連体修飾語となるもの）を作る接

辞だが、体言類（格助詞を伴い、名詞となるもの）としても使えなくはないという。そして、「季節風」における「風」と違い、「中華風」「紳士風」などにおける「風」をも相言類を作る接辞とする。

山下（2011）は「式・風・的」を相言類の接尾辞とし、「泥縄式な政策」「山小屋風なカフェ」「科学的な実験」などのように名詞の前接語を形容動詞語幹に転換する機能を持つという点で共通すると指摘する。

両者によると、「式・風」は相言類を作り、前接部分の品詞性を相言類に転換する機能を持つ。ただ、荒川（1986）で言うように「英国式」は体言類としても使えなくはないため、常に相言類であるわけではない。そして、品詞性を転換する機能は前接部分と複合語の品詞性の違いが前提である。従って、「英国式」が体言類として使われる際には、体言類である「英国」の品詞性が変わらないこととなるので、複合語の品詞性とそれに伴う「式・風」の機能は絶対的なものではないということがわかる。

2.2 語構成要素から節構成要素へ

影山（1993：326, 1997：34－35）では、「句の包摂－すなわち、語の内部に句が包みこまれる－という現象」の一種として、元来は形態素ないし語を対象とする語彙的な接辞要素が、統語的な句にまで拡張する場合があるとする。例えば、「～風」は形態素「洋」（洋／風）、語「フランス」（フランス／風）につくことから、句の単位にまで拡大して「中世のフランス／風」といった表現を生む、と述べる。さらに、影山氏は「風・用」などが作る「句を包摂した合成語」は、もう一種の、統語構造で生成される「句の包摂」（もともと節をとる接続詞である句接辞「がてら・ながら・中」によって作られるもの）とは違うと指摘する。影山氏のいう「句の包摂」において、前者の「接辞要素」が包摂する句は名詞句であり、後者の「もともと節をとる」場合の句は動詞（連用形）述語句であることが特徴的である。

青木（2016：409）は歴史的な視点から、動詞述語句の包摂と名詞句の包摂には連続性があることを指摘する。青木（2016）は「前部要素の「拡張」もいづれも名詞から名詞句への拡張であって、「名詞」という性格自体は変わっていない。」と述べ、格助詞を含んだ述語句への拡張を文法範疇の転換を伴っていると指摘する。その際、青木氏は「句の包摂」に見られる二つの重要なポイントを指摘する。一つは、包摂する句は名詞句（動詞連用形）から述語句（動詞連

体形／終止形)へと変わることであり、もう一つは句を包摂した「合成語」が述語句と接続句となることである。このポイントによって形態素である接辞が統語的な句(動詞句)を包摂する助動詞へと変化する歴史を描いている。

2.3 「式・風」に関する課題

課題1 「式・風」の語構成と節構成の類似性と相違の問題

複合語の場合、「日本式・日本風」は「の」をとり名詞を修飾することがある(「日本式の家・日本風の家」¹⁾)が、「東洋風な建物・現代風なイメージ」のように、「～風」は「な」をとるものが多い。それだけではなく、「式・風」両者とも語のレベルを超えた句につくが、「風」は、「中世のフランス風・テレビのスペシャル番組風」(影山(1993))のような、拡大した名詞句につく例が見られるのに対し、「式」には見られない。一方、「式」は「風が吹けば桶屋がもうかる」式・人を見たら泥棒と思え式」というような文相当の句につくことが多く見られるが、「風」にはそういう用法が極めて少ない²⁾。

従って、「式・風」は語構成においても、節構成においても類似性があるとともに、大きな差異を有することがわかる。山下(2011)は「式・風」の大きな合成語「X式Y・X風のY」における意味の派生を考察しているが、「式・風」の語構成と節構成における類似性と相違に触れることがない。また、影山(1993)は「語の内部に句が包み込まれる」現象の一つの例として「風」を取り上げるのにとどまり、「式」に関しては言及していない。

そこで、本稿は、語構成と節構成における「式・風」の類似性と相違を明らかにすることを一つの課題とする。

課題2 語構成要素と節構成要素との関わり

「式・風」には、「名詞句・文相当句」という前接部分の要素が拡大したと見られる用法だけではなく、「引く式・デキる風」というような動詞連体形につく用法も見られる。動詞連体形につくということは統語的に語として振る舞うということである。そのような動詞連体形につく用法を「名詞句・文相当句」につくものと峻別する考え方(影山(1993))もあるが、それらを連続的に捉

¹『日本書き言葉均衡コーパス』から抽出した例である。

²『瓢箪で鯉を押える風な詩を書いた』(阪田寛夫(著)『ノンキが来た』)という一例のみである。

える考え方もある（青木（2016））。

影山（1993:329）は前述のように「句の包摂」を種類分けしている。「風」のような「元来形態素ないし語を対象とする語彙的な接辞要素が、統語的な句にまで拡張する場合は「何か不安定な感じがつきまとうが」、「動詞句＋そう（だ）・げ（だ）・っきり・たて・済み・っぱなし」のような「もともと統語的な句接辞の場合は日本語として何ら不自然さは呈さない」と述べる。すなわち、「名詞句につく」場合と「動詞句につく」場合によって「語彙的な接辞要素」と「統語的な句接辞」を区別している。

それに対して、青木（2016）は「げ・そうだ・らしい」などを、歴史的な視点により、「述語連用形」につくことから「述語連体形」につくという形を生み出し、「げな・そうだ・らしい」という動詞述語句につく助動詞へと変化することを説明している。しかし、青木氏はなぜ「述語連用形」から「述語連体形」を生み出すことになるのかについては言及していない。

本稿が扱う、「式」は文相当句（名詞句相当と見なせる）につくとともに、「動詞連用形・動詞連体形」にもつく（折りたたみ式・引く式）。そして、「風」は名詞句につく以外、「動詞連用形・動詞連体形」にもつく（手作り風・デキる風）。それぞれの用法には、語構成レベルと節構成レベル（統語的レベル）の違いがあることはわかるが、それぞれの用法の間にどのような連続性が存在するのか不明である。さらに、「風」は「風（な・に・だ）」のような青木（2016）の指摘する助動詞と近い統語的な振る舞いをする用法を持つが、「式」は主に「式（の）」の用法となる。従って、語構成要素というレベルから逸脱することは、影山（1993）のいうような完全に別種のものとも見なることもできなければ、青木（2016）の指摘する連続性の方向で統一することもできない。

以上、本稿は語構成要素が節構成要素となる際の「式・風」の違いを明らかにすることによって、語構成と節構成の関わりを追究することを課題とする。

3 字音形態素としての「一式・一風」

3.1 「一式・一風」の意味

『日本国語大辞典 第2版』では、本稿の対象となる「一式・一風」の解釈は以下のようになっている。

「式」〔語素〕：名詞に付いて、型・様式・方法などの意を表わす。「日本式」「洋式」「手動式」「電動式」など。

「風」〔語素〕：名詞に付いて、それに類する、いかにもそれらしいなどの意を添える。(イ)形式・様式などについていう。「教会風」「西洋風」「ゴシック風」「殿中風」など。(ロ)人についていう。「商人風」「役人風」「学生風」「天才風」など。

山下(2011)は「接尾辞の意味は、それを構成する要素と合成語の分析から抽出されるもので、接尾辞単独では、意味は確定しない場合が多い」とし、「一式・一風」の意味を合成語から抽出している。そのため、「多義の形態素」と呼ぶが、それぞれの「多義」は「式」が結ぶ前接部分と後接部分の意味の関係性によるものである(例えば、「自動ドア式出入り口」の前接語(本稿の「前接部分」である)Xがシステムや具体的内容を表し、その中で「式」は「システム・方法」などの意味を添加するのに対して、「日本式庭園」の場合には、前接語Xは直接的にその具体的な内容を表すものではないため、「式」の「システム・方法」の意味は合成語レベルでは明確でないと指摘する)。それに対して、本稿は、「一式・一風」のいずれも、固有の意味を持つ字音形態素として認めることを前提とし、「一式」の意味は「様式・方式」、「一風」の意味は「特徴」とする。

3.2 「一式」の特徴

形態素「一式」の意味を「様式・方式」とまとめたが、その意味は名詞性が強いものであることがわかる。ただし、山下(2011)は「一式」は連体修飾語となる形容動詞を構成する相言類のものであるとする。本稿では、BCCWJにおける調査から「～式」の具体例をあげ、その使用環境を表1に示す。

| 語例 | 複合語の一部 | 「の」+名詞 | 格助詞を伴う | その他 | 合計 |
|----------|--------|--------|--------|-----|-----|
| A. 日本式 | 51 | 53 | 27 | 3 | 136 |
| B. 機械式 | 76 | 10 | 10 | 5 | 101 |
| C. 回転式 | 33 | 23 | 2 | 6 | 64 |
| D. 可動式 | 5 | 12 | 3 | 6 | 26 |
| E. 雪だるま式 | 1 | 1 | 0 | 17 | 19 |

表1 「～式」の使用環境

表1³では、前接部分の意味によって、A.「地域を表すもの+式」(日本式)、B.「物を表すもの+式」(機械式)、C.「動作を表すもの+式」(回転式)、D.「状態・様態を表すもの+式」(可動式)、E.「比喩の対象を表すもの+式」(雪だるま式)⁴という五つに分けている。

表1から「-式」の語構成における特徴を二つにまとめられる。一つ目は、前接部分の品詞性の多様性である。「-式」の前接部分はA「日本」、B「機械」、E「雪だるま」、のような体言類(格助詞を伴い、名詞になれるもの)、Cの「回転」のような用言類(「する」を伴い、動詞になれるもの)、そして、Dの「可動」のような結合類(単独で自立できないもの)をとる。従って、『日本国語大辞典 第2版』で指摘する名詞につく用法だけではないことがわかる。二つ目は、Eを除き、「~式」は格助詞⁵を伴う用法を持つことである。ただし、全体の割合から見ると、A「日本式」の格助詞を伴う用法が最も多く、B「機械式」がそれに次ぎ、C「回転式」とD「可動式」が少ない。そして、E「雪だるま式」は「比喩」の意味があるため、基本的に連用修飾語として使われる。従って、Eを除き、「~式」は格助詞を伴うが、連体修飾語⁶となる用法をも多く持つことが明らかである。

³ 表1であげた語例は使用頻度が上位にあるものである。基本的に、それぞれの分類において延べ語数の最上位の語を選ぶが、延べ語数が多い「体外式」(66例)は「体外式除細動器」(53例)がほとんどであるため、D類には「可動式」をあげた。

⁴ 同類の「芋蔓式」は「に+動詞」15例、格助詞「で/では」2例、その他(です)1例、が見られる。「雪だるま式」「雪達磨式」「雪ダルマ式」という出現形の違いを問わずに収集した。また、「に」を伴い連用修飾する用法がほとんどであり、「その他」に入れた。ただし、「比喩」という意味が複合語の中に入っているため、本稿では特殊な用法として扱う。

⁵ 本稿は、「は」を含めて、格助詞とする。また、格助詞の「に」と「である」(=「だ」)の連用修飾形式「に」とを区別する。

⁶ 「~式」は基本的に「の」を伴い連体修飾語となるが、「な」を伴い連体修飾語になる例が7例見られる。そのうち、3例(非五代目式な部分・道化役式なもの・三枚目式な効果)が同じ作品に見られる。そして、「文相当句+式」は1例(「何でも見てやろう」式な人間)あり、ほかの3例は「ミンガス式な題の新曲・泥縄式な政策・清楚なセッション式な建物」である。

| 語例 | 格助詞 (共起の例) | 名詞としての意味 | 「～式の N」の意味 |
|----------|---|-------------------|------------------------|
| A. 日本式 | を (見習う)・に (する) | 日本特有のやり方・様式 | 日本特有の様式を持つ (である) N |
| B. 機械式 | を (購入)・は (極端に いえば)・なら (多板ク ラッチが)・に (する) | 機械という様式 (の物) | 機械というタイプである N |
| C. 回転式 | と (回転式と観音開き) | 回転するという様式 (の物) | 回転するというタイプ である N |
| D. 可動式 | に (する) | 可動 (だ) という様式 (の物) | 可動 (だ) というタイプ である N |
| E. 雪だるま式 | × | × | 雪だるまに似ている方式 である N |

表2 複合語「～式」の文中における位置とその意味

一方、表2から、「～式」は名詞としての意味に違いが見られる。

- (1) やがては氏名ばかりか生活慣習 (言語・宗教など) まだが日本式に変えられていきました。(佐藤文明 (著)『在日「外国人」読本』)
- (2) 換言すれば、日本式での歓迎会のような慣習は内なる社会に取り入れられる為の儀式とも考えられます。(鈴木伸二 (著)『誰も知らなかった常識の背景』)
- (3) 例えば、金銭登録機は、五十年代に入って機械式から電子式への切換えが急速に進展し、五十四年にはほとんどすべてが電子式になった。(経済白書 1980)

(1) は「氏名」「生活習慣」を「日本特有の様式 (に変える)」と解釈できるが、(2) は「日本の特有の様式 (やり方)」で行う歓迎会という意味である。「日本式」は「日本特有の (日本にしかない) 様式 (やり方)」を表すとわかる。一方、(3) の「機械式」は「機械という様式 (タイプ)」を表すとも言えるが、前文脈の「金銭登録機」の中の一つである「機械という様式の物」とも解釈できる。「日本式」は「日本特有の様式 (やり方)」という一定の意味を持つのに対して、「機械式」は物を前提としなければならない「様式」、あるいは「～という様式の物」、両方に解釈できる。

しかし、連体修飾語の場合、「～式」は「様式」の意味を持つが、後接する名詞のタイプを限定する機能がより重要であると思われる。「日本式の建築・機械式の腕時計・回転式の劇場・可動式の引き出し」の「～式」は「どのような・どういう」という側面から名詞を限定し、名詞のタイプ (様式) を説明す

るものである。

従って、複合語「～式」は「～様式（方式）／～様式（タイプ）の物」という意味を持ち、格助詞を伴い、名詞になる一方、「～様式（タイプ）」という意味で、名詞の属性を叙述する連体修飾語になる用法も持つ。ただし、こういった点は、一般的な名詞にも見られる特性である。

西山（2003）は「N₁のN₂」の連体修飾関係の多様性を指摘しているが、その中で、「女性の運転手・長髪の少女」における、「女性の」「長髪の」は「女性である・長髪である」という叙述的な意味を表す連体修飾関係であると述べている（西山（2003：19－31））。また、新屋（2014：52）も「長髪」は「主体の性状を規定する叙述性」があると指摘する。つまり、「女性・長髪」は名詞として自立するが、叙述する意味を持ち、名詞を修飾することができる。村木（1998）は「長髪」は形容動詞でも第三形容詞⁷でもなく、格の体系を持つ名詞でありながら、物や性状という意味的な二面性を持つ複雑な様相の語であると指摘している。「～式」は「長髪」と同じような二面性を持つ複雑な語であると言える（ただし、村木は本稿の捉え方とは異なり、「～式」を第三形容詞に入れている）。

しかし、「長髪」は物を表す意味を持つが、形態素「一式」自体は物の意味を持たない。そのため、「～式」の前接部分の意味は複合語の意味と機能に影響する点が存在すると思われる。複合語において、B「機械式」C「回転式」D「可動式」の前接部分は具体的な内容であるが、A「日本式」の前接部分は具体的な内容ではない。しかし、「機械式・回転式・可動式」の方が連体修飾語になる用法がより多く、自立する際にも、「～様式の物」を表し、その「物」は文脈に現れるその様式を持つ物である。それに対して、「日本式」は自立する用法が多い。さらに、「日本式」は具体的な物に頼らず、「様式」を表す名詞の用法を持つ。つまり、「一式」は様式を表す複合語を作るが、前接部分が具体的な物や状態の場合、その意味は物を表す名詞に頼る傾向があるため、「物」を表すか、その「物」の属性を表すかという二面性を有することになると推測される。

⁷ 村木（2012：88－91）は「～式」を「第三形容詞」「－の／に／だ」のパラダイムを持つ（「－に／だ」のいずれかがかけていることもある）。ただし、名詞の各のパラダイムである「－が」「－を」をしたがえないこと、連体修飾をうけないことを条件とする」に入れている。

一方、「～式」には、Eのような連体修飾語・連用修飾語にしかならないものも存在する。

- (4) 私は、「雪だるま式」の効果的な英語学習を行うためにも、「英語を日本語に訳さないで直接理解する」ことは、とても大切なことだと考えていますが、(後略) (ますこまさき(著)『これは一英語学習者の反乱です。』)
- (5) 例外的にフィードバックがプラスに作用して、ホルモン分泌が雪だるま式に増加することがある。(樋口隆(著)/河田光博(著)『シンプル解剖生理学』)

(4) は「雪だるまのような様式の「効果的な英語学習」」という意味であり、(5) は「雪だるまの作り方と同じよう(に増加する)」という解釈である。「ような」という「比喻」の意味が入っている点が特徴的である。

このように、A～D類の「～式」が前接部分をそのまま一つの様式として取り上げるとの違い、E類の「～式」の意味には比喻が入ることによって、「～式」が物を表す名詞としての用法を完全に失ってしまうことがわかる。つまり、複合語の中で、「一式」には、抽象的な地域を表す名詞につき、「様式」を表す名詞から具体的な物や状態を一つの様式として取り上げその様式の物を表す名詞へ、そして、前接部分を比喻の対象として取り上げ、それに類似する形という連体・連用専用の形式へという変化が見られると言える。しかし、いずれの用法においても、「一式」は「様式」という意味を加え、様式を表す複合語を構成する。

3.3 「～風」と「一式」の類似性と相違

形態素「～風」は「一式」と類似する点があるとともに、違いも明確である。BCCWJにおける「～風」の典型的な語例の使用環境を表3に示す。

| 語例 | 複合語の一部 | 「の」+名詞 | 「な」+名詞 | 格助詞を伴う | その他 | 合計 |
|------------|--------|--------|--------|--------|-----|----|
| A. 日本風 | 6 | 46 | 0 | 32 | 4 | 89 |
| B. サラリーマン風 | 1 | 11 | 2 | 1 (が) | 3 | 18 |
| C. 山小屋風 | 1 | 10 | 1 | 1 (に) | 1 | 15 |
| D. 手作り風 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 2 |

表3 「～風」の使用環境

表3からわかるように、「～風」は前接部分の意味によって、A. 「地域を表すもの+風」(日本風)⁸、B. 「人を表すもの+風」(サラリーマン風)⁹、C. 「物を表すもの+風」(山小屋風)、D. 「性質を表すもの+風」(手作り風)、に分けられる¹⁰。また、「～式」と違い、「～風」は人・物(「手作り」も「手作りの物」を指すと言える)を表す体言類にしかつかないことがわかる。以下の「～風」は「日本風」を除くと、基本的に名詞として使われないことも特徴的である。

| 語例 | 格助詞(共起の例) | 名詞としての意味 | 「～風のN」の意味 |
|------------|---------------------------|---------------------------------------|-------------------|
| A. 日本風 | に(呼ばれる)・ と(調和する)・を(守る) | 日本の特有の様式 (あるいは、日本に類似 する特徴を持つもの) | 日本に特有の特徴を 持つN |
| B. サラリーマン風 | が(つぶやく) | サラリーマンの特徴を 持つ人 | サラリーマンの特徴を 持つN |
| C. 山小屋風 | に(「。」で文が終わる) | 山小屋の特徴を持つ物 | 山小屋の特徴を持つN |
| D. 手作り風 | × | × | 手作りの特徴を持つN |

表4 複合語「～風」の文中における位置とその意味

表4からわかるように、「日本風」以外の「～風」は自立語となりにくく、連体修飾語になる傾向がある。ただし、一部の「～風」は「～特有の様式」と「～の特徴を持つ人・物」という意味を表す名詞として使われることもある。

- (6) まず「様式再現は愚策のみ」, 「科学の進歩と美的観念の時代錯誤」, 「国風問題と批判能力」の各章で、西洋様式の再現も、新興建築と呼ばれる形だけのモダニズムも、日本風へのこだわりも厳しく批判する。(山口廣(著)『新建築学大系』)
- (7) 「日本は儒教を採り入れたが中国人の考えを日本風に取替えてしまい、狭義の忠、君主への忠を第一に据えてしまった」と指摘している。(清水邦男(著)『日米<共同幻想>論』)

⁸ 「中華風・中国風」は「日本風」より語数が多いが、「～式」との比較をより厳密にするために、同じ前接部分の「日本風」にした。

⁹ 合計の数は「浪人風」(24例)が多いが、「浪人風の男」が15例を占めるため、「サラリーマン風」を選んだ。

¹⁰ 「キメキメ風(な写真)」という用法もあるが、それは一例しかないので、対象外とする。

(8) アナタの目の前に揺れる三十そこそこのサラリーマン風が、何かをつぶやいている。その声は、酔いのせい、次第に大きくなっていく。

(永倉萬治(著)『アナタの年頃』)

(9) まず、キットハウスの壁をドリルでプチ抜き、風呂場とトイレのためのスペースを在来工法により増築。屋根は庇が突き出た山小屋風に。

(実著者不明『自分でつくるキットハウス』)

(6) の「日本風」は「日本に特徴的な(特有の)様式」と解釈できることから、「日本式」と同じように「方式・様式」を表す名詞の用法である。(7) は「日本特有のもの(考え)」或いは、「日本特有の様式」のいずれの意味にも取れるが、(8) の「サラリーマン風」は「サラリーマンの特徴を持つ人」であり、(9) の「山小屋風」は「山小屋の特徴を持つもの(屋根)」である。

また、表4に示すように、「～風」は「～式」と同じように連体修飾語になり、名詞の様式(タイプ)を限定する。しかし、「サラリーマン風」は基本的に人を修飾し(サラリーマン風の客・男・人)、「山小屋風」は物を修飾する(山小屋風のお店・建もの・宿泊室・ガーデンチャペル)という傾向がある。つまり、「～風」は「サラリーマン・山小屋」という特徴を持つ人・物を表すか、その特徴を持つという側面から人や物を表す名詞の属性を叙述(限定)するという二面性を持つ。従って、「～風」と「～式」は名詞の属性を叙述するという共通する側面を持つとはいえ、後接する名詞との意味関係には違いが存在することがわかる。

また、「～式」の前接部分は物・動作・様態を表すという違いがあるが、比喩の意味が入るE類を除き、複合語「～式」は「～という様式の物」という意味を表すことができる。それに対して、「～風」は基本的に人・物を表す体言類につき、複合語「～風」も前接部分(人・物)と一致する。すなわち、A類以外、「～風」の前接部分は複合語の意味を決定する傾向がある。それだけではなく、連体修飾語になる際の被修飾語である名詞も「～風」の前接部分と同じジャンル(人あるいは物)であり、「～風」は単純に名詞のタイプを限定するというより、被修飾名詞(人・物)と前接部分(人・物)の類似性を示す意味も存在すると見られる。

従って、「～式」と「～風」は「様式」という意味を表す名詞を作ることはできるが、前接部分が地域を表す場合に限定される。「～式」は基本的に「～様式の物」という意味を表す名詞を作るが、具体的な物を表す名詞の「様式」

という属性を限定する連体修飾語となりやすい。しかし、「一風」は「人・物（前接部分）の特徴を持つ人・物」という意味を表す名詞を作ることできるが、基本的に、「人・物（前接部分）の特徴を持つ」という意味を持って、具体的な人・物の（類似する相手を示す）「特徴」という属性を限定する連体修飾語となる。この点に、「式」と「風」の意味の違い（様式と特徴）が見える。また、その違いは次節に見るように節構成にも影響するのである。

4 節を作る「式」と「風」

4.1 節構成の特徴

「式」が作る語以上のものを全て節とするが、前接部分の統語的な違いがある。表5は節「X式」の前接部分と文中の位置を示したものである。表5に示したものの以外、「動詞句+式」は「でも」がつくものが1例、「を」を伴う用法が1例、「次第」がつく用法が1例ある。「慣用語・文相当句+式」が「に」を伴う例が5例ある。

| 前接部分 | という句 | | 動詞句 | | 文相当句 | |
|------|-----------------------|----------------------|-----------------------|----------------------|-----------------------|----------------------|
| | 「の」を伴い 名詞を修飾 する | 「だ」を伴い 文が完結 する | 「の」を伴い 名詞を修飾 する | 「だ」を伴い 文が完結 する | 「の」を伴い 名詞を修飾 する | 「だ」を伴い 文が完結 する |
| 例文数 | 5 | 1 | 10 | 2 | 29 | 2 |

表5 「X式」の前接部分（=X）と用法

一方、「式」と比べて、「風」が作る節「X風」の数は圧倒的に多い。表6に示した「という風だ」以外、「という風な」は19例、「という風を」が2例、「という風も」が1例見られるが、「を・も」を伴った場合の「風」は「様子・素振り」という意味を表す形式名詞であり、様態を説明する「という風だ・という風な」とは違う。また、表6で示す「という風」の表記を「というふう」に変えると、BCCWJでは「というふうに」が8232例、「というふうな」が1359例、「というふうで（ある）」が22例と圧倒的に用例数が増える。「（という）ふうだ」は助動詞として定着していることが明らかである。全体的には、「という句・動詞句・ような句・形容動詞句」などに「風」がつくが、「様態」を示す助動詞の場合（「の／な・に・だ」という活用形を伴う「X風」）と自由に格助詞を伴う名詞節「X風」を作る形式名詞の場合がある。

ここでは、最も例文数が多い「という句¹¹⁾」につく典型的な助動詞「風だ」の用法を数えて、表6に示す。

| 前接部分 | という句 | | | |
|------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|--------------------------|
| | 「の」を伴い 名詞を修飾 する | 「な」を伴い 名詞を修飾 する | 「に」を伴い 同士の修飾 する | 「だ」を伴い 文が完結 する [1] |
| 例文数 | 5 | 19 | 218 | 16 |

表6 「という風(だ)」の用法

表6の「という風(だ)」節の用例数は表5で示す「X式」節の総例文数より多いことがわかる。そして、「という風」は「に」を伴い、連体修飾節になるのが最も多く、「式」が「X式の・X式だ」にしかならないのと違い、「風だ」は典型的な助動詞の用法を持つことが分かる。

以上の考察を踏まえ、次節では、連体修飾節の用法、連用修飾節の用法・述部用法にわけて、節における「式・風」を考察する。

4.2 「式」が作る節の用法

4.2.1 連体修飾節となる場合

「式」が作る節は多くなく、そのほとんどは「の」をとり、連体修飾節になる。

- (10) 私の家の暖房は、半地下室の、そのまた地下で灯油を燃すという式のものである。(山口瞳(著)『男性自身巨人ファン善人説』)
- (11) その承知も、父のいうことだから無理でもしたがうという式の承知にしかとれない。(山手樹一郎(著)『拾った女房/矢一筋』)
- (12) それまで、人形劇というと右手を布の衣装に差し入れて頭を動かす式の劇や棒操り、ストーリーも子どもを対象としたもので、(南千代(著)『夢みるエゴイストたち』)
- (13) 平和ボケの上、何でも“お上”に任せる式の日本人に、血を流してまで何かを守ろうという意識はほとんど(矢部武(著)『アメリカよ、銃を捨てられるか』)
- (14) 結果、家庭内で可能な外部とのコミュニケーション、すなわち通信

¹¹⁾「つていう・といった」等の形式もあるが、「という(ふ)句」だけを対象とする。

に対するニーズが高くなる。いわば「風が吹けば桶屋が儲かる」ならず「雪が降れば通信屋が儲かる」式の構図だ。(中野明(著)『腕木通信』)

- (15) 客を心からもてなす気持ちと、人を見たら泥棒と思え式の無味乾燥な常識とは、どうしたって両立しない。(加納朋子(著)『掌の中の小鳥』)

前接部分の形態的特徴からみると、(10)～(13)は二つの捉え方が可能である、一つは「～という式・動詞句式」は名詞節であり、「もの・承知」等の連体修飾節になるという捉え方であり、もう一つは、内容句である「～という・動詞句」が「式の」につき、「もの・承知」等につくという捉え方である。前者は「式」を連体修飾節になる名詞節を構成する形式名詞として捉える考え方であり、後者は「よurna」と同じように、動詞句につき、連体修飾節を構成する文法形式(助動詞)として捉える考え方である。

ただし、複合語の「～式」と同じく、「X式」も「の・だ」しか伴わないという特徴がある。そのため、「式の・だ」が独立したシステムとは考えにくく、「式」は「という句・動詞句」につき、名詞節を作るという考え方の方が妥当である。しかし、「式」が形式名詞であるかどうかは問題である。というのは、一般的に言われる形式名詞と違い、「式」が作る節が自由に格助詞を伴う用法をほとんど持たないし、(14)、(15)のような「文相当句」につく例もあるからである。

従って、ここでは「式」は前接部分につき、名詞節を作るとともに、連体修飾節の用法を持つものであるとしか言えない。

4.2.2 述部となる用法

- (16) 自分に甲斐性のできんうちは、親はわしを生んだ以上、小遣いぐらいよこすのあたりまえだ。教育するのも、着るものくれるのもあたりまえだ。それができないなら、何のためにわしを生んだんだ、という式でしょ。(横井庄一(著)『「文芸春秋」にみる昭和史』)

- (17) 日本はふすまとか玄関でも、みんな引き戸式だから、手前に引いたり押ししたりって、あまりないですよ。ぼくの場合、押し引きの生活になったのは、考えたら団地に入ったときですね。団地へ行ったら、突然玄関から押す式でしょう。(天野祐吉(著)/安野光雅(著)『ことば・把手・旅』)

(18) 以上「風が吹けば桶屋が儲かる」式で。(実著者不明『ヨーロッパ・サッカーのベストプレイヤー 100 人』)

(16) の「という式でしょ」の「式」の意味は推定しにくい、前後の文脈からは、「という式」は「というタイプ(様式)のもの(考え方)」という意味であると見なせる。さらに、(17) の「式」は具体的に「押すというタイプのもの(戸)」であり、前文脈である「引き式(戸)」と同じ意味の完全な名詞(節)である。(18) の「風が吹けば桶屋が儲かる」式も完全に名詞である。

これらの例文から、「X 式+だ」は「複合語(～式)+だ」(「日本式だ・機械式だ」)と同じ属性を叙述する名詞文の述語部分であると考えられる。ただし、(16) は観点(考え方)を示すため、「主観性」を持つモダリティ相当のものとも見ることもできるが、「式」は「式だ」として成立していないため、「だ」による判断を伴うという主観性と「考え方」を表す内容とが偶然に重なったものであると判断される。従って、「X 式」が述部になる用法も連体修飾節と同じ属性叙述という機能を果たすのである。

4.2.3 「式」の属性叙述という機能

「式」が作る節は名詞節であり、その名詞節は連体修飾語と述部になる。つまり、節「X 式」は複合語「～式」と違い、物を示す意味をほとんど持たなくなり、専ら属性叙述をする名詞節である。

以上から、「式」が作る複合語および節(「日本式・機械式・回転式・可動式・地下で灯油を燃すという式・右手を布の衣装に差し入れて頭を動かす式・雪が降れば通信屋が儲かる」式)はいずれも物の属性を叙述する機能を有するとわかった。また、その叙述の内容は「様式」であるため、様式の内容にあたる前接部分しかとらない。

しかし、名詞節を作るものと名詞を作るものとは統語的レベルが違う。本来、形態素は自立語という段階を踏んだうえで、節を構成することとなるが、「式」は自立語という段階を経由せず、語構成の一部と節構成一部という統語的なレベルが異なる用法を持つこととなる。結局、「式」は「式だ」というような助動詞にもなれず、完全な形式名詞でもない中途半端な段階にあると言わざるを得ない。

4.3 「風」が作る節の用法

4.3.1 格助詞をとる名詞節の場合

「式」とは違い、「風」が作る名詞節は格助詞をとることができる。ただし、その際、「風」の意味は語構成要素の意味とは大きく異なることが観察される。

(19) 壮年の士官は、すまないという風も見せずにいった。(富野由悠季 (著)『オーラバトラー戦記』)

(20) 玄角の顔が、何ごとかを考えている風になる。(夢枕獏 (著)『蒼獣鬼』)

(19) (20) の「風」は「(人間の) 様子・素振り」という意味を表す。さらに、「～という風・動詞句風」は格助詞を伴い、最も名詞節らしい用法であるといえる。しかし、これは複合語「～風」の「様式・～の特徴を持つもの」という名詞の意味とは大きく違う。ただ、「(人間の) 様子・素振り」という意味は「サラリーマン風」のような人間につく「風」の示す「特徴」の意味と関連する可能性はある。

4.3.2 連体修飾節となる場合

連体修飾節の用法は「風」が作る節に多く見られ、その中で、複合語における「風」と関連するものも見られはするが、基本的には複合語における「風」と異なる点が特徴的である。

(21) そのころ繁さんの家へ出入りする人は、みな一癖ありそうな破落戸という風の者ばかりでした。(神坂次郎 (著)『勝者こそわが主君』)

(22) 頭だけでいくらわかった風なことを言ってもらっても、手足の動かない男性では困る。(木下明美 (著)『女の言葉が男を変える』)

(23) ゆかりがどんな風な気持ちでいるのか、背中に視線を遣ったり、彼女に触れている太ももに神経を集中して、真意を見極めようとした。

(神崎京介 (著)『週刊現代』)

(21) は前接部分の名詞(「みな一癖ありそうな破落戸」)に「という風」がつくものであり、意味関係から見ると、「みな一癖ありそうな破落戸という風の者」は「みな一癖ありそうな破落戸の特徴を持つ者」という意味であり、複合語の「人+風」(B)「サラリーマン風の男」の意味関係と同じである。しかし、(22)、(23)の「風」の前接部分は複合語の場合と違い、「物・人」ではなく、「頭だけでいくらわかった」、「どんな」のような様態・状態を表すものである。さらに、(22) (23)の「風な」はともに「こと・気持ち」の内容を示す

という機能を持ち、「～風」というまとまった名詞節というより、「内容句＋風な＋名詞」という構成となる。つまり、「風な(だ)」は前接部分の外にある助動詞のようなものであると言える。このような「風だ」は「風に」となり連用修飾節としても使われる。

4.3.3 連用修飾節となる場合

「式」は連体修飾節(X式(の))と述部(X式(だ))になる名詞節しか構成できないが、「風」は連用修飾節(～風に)となる場合が非常に多い。

(24) それからその手紙に対する返事が来なくても、僕のことを礼を失した人間だという風には思わないでください。(村上春樹(著)『遠い太鼓』)

(25) だが妙に醒めたところのある人だから、わざと崩れた風に見せかけているのかもしれない。(塩川治子(著)『北斎の娘』)

(24)、(25)の「X風(に)」は連用修飾節である。また、連用修飾節「X風に」は動詞の様態(傾向)を説明する機能を持つ。例えば、(24)「どのように思う」の「どのように」の思う内容の部分が「X風」であり、(25)の「X風」も「どのように見せかける」の「どのように」の部分である。この場合も、「風に」は前接部分の外に接続し様態の内容を示すという機能を持つものであり、助動詞「ようだ」と基本的に同じである。

4.3.4 述部となる場合

「風だ」は述部となる用法もあるが、同じく内容を示す機能を持つものである。

(26) レーニンになると、もうスミスとかヒュームとかイギリス経験論のことは視野に入っていません。ただ壊滅するためにだけ存在している、という風でした。(鷲田小彌太(著)『考える力の冒険』)

(27) その素振りは今の日本人に同情もし、敗戦という現実を共同の運命と感じているかのようにさえ思われる風である。(榎本捨三(著)『満州崩壊』)

(26)の「～という風でした」は「レーニン(の理論)」の具体的な内容を示すものであるが、「という風でした」は内容を示す機能しかもたない。(27)の「風である」は「素振り」の内容を説明する部分を提示するものである。「風だ」は助動詞「ようだ」と同じであると言える。

4.3.5 「風だ」の様態を示すという機能

「風だ」は節を作るが、「X 風な・に・だ」という活用が見られるだけではなく、前接部分の外につき「様態（内容）を示す」という機能を持ち、前接部分を一つの様態（内容）を節としてまとめ上げるものである。そのような「風だ」は助動詞「ようだ」に類似すると認められ、前接部分の意味も、複合語の「～風」の前接部分の意味と違う。そのような「風だ」は「様子・素振り」を表す形式名詞と関わる可能性が高い。

しかし、連体修飾節の用法で見られる「 N_1 という風の N_2 」（一癖ありそうな破落戸という風の者）は様態の内容説明である「風だ」とは違う。その場合、「（という）風」は複合語における「風」と同じく、前接部分の N_1 の特徴を持つという意味を持ち、 N_2 である後接する名詞のタイプ（様式）を説明するものである。ただし、このような用法の「風」は極めて少なく、前接部分は人を表す名詞しか見られない。このような「風」も「式」と同じように、「という」句を受ける形式名詞と共通する機能を持つ。

5 語構成と節構成の接点

本稿では、語構成と節構成両方に現れる「式」「風」を考察した。本来、語の構成要素が自立すれば節構成の一部となるのは自然な流れであるが、「式・風」（特に、「式」）は自立する用法を持たず、完全に自立する語になれないという特殊性がある。本節では、「一式・一風」が構成する語の特徴、「式・風」の節における特徴、そして、それらの共通点を明らかにし、語構成と節構成の接点を探る。

5.1 「式」と「風」から見る語構成と節構成の違い

「式」と「風」の前接部分の統語的レベルには形式の多様性が見られる。その多様性は本来、形態素と語を峻別するものである。しかし、「式」と「風」において、そのような形態素と語の用法にははっきり分けられない部分も見られる。

5.1.1 「式」の語構成と節構成

「式」は語構成として「体言類・用言類・結合類」につき、節構成として「動詞連用形・動詞連体形」、さらには、「文相当句」にもつく。しかし、前接部分の統語的レベルの違いに関係せず、「式」が作る複合体（複合語と節）は

名詞の属性を叙述する機能を持つ。そのため、「式」が作る複合語も節も物を表す名詞の連体修飾部分になりやすいという特徴がある。しかし、「式」が作る複合語は名詞として自由に格助詞をとる用法を持つが、節になると、連体修飾用法と述部用法しか持たなくなる。そして、語構成においては、前接部分の意味の違いによって、複合語の表す意味が「～特有の様式」から「～様式のもの」へと変化するが、節になると、「～特有の様式」という意味が全くなくなる。つまり、「式」は節構成になると、専ら属性叙述を行う傾向が強くなるのがわかる。これは、節になると、前接部分の内容が複雑化し、具体的になるためである。「日本式」は、前接部分が地域しか表せないが、逆に「～特有の様式」というまとまり特有の意味を持つ。それに対して、「それができないなら、何のためにわしを生んだんだ、という式でしょ」の前接部分は一つの考え方を具体的に描写するものであり、「式」は「という」を通して、その内容を一つの考え方のタイプ（様式）としてまとめるが、「～という式」全体はまとまり特有の意味を持たない。

さらに、「式」は「名詞句+式」という用法を持たない。つまり、影山（1993）の形態素による句の包摂ではなく、「～という式・動詞句式」という、句接辞による句の包摂しかない。そして、青木（2016）のいうような、「動詞連用形+式→動詞連体形+式→動詞連体形+式だ」という助動詞化するプロセスが見られない。したがって、「式」は語構成レベルと統語的レベルの両方の機能を持つ形式にとどまる。すなわち、「式」の「様式」という意味と合わせて考えると、「式」は属性叙述の名詞を構成する形態素と、属性叙述の名詞節を構成する形式名詞両方の機能を持つと言える。

5.1.2 語構成と節構成の「風」の不統一性

「式」と違い、「風」は複合語の場合、主に人や物を表す前接部分につき、それに類似する特徴を持つ人や物という属性叙述をする複合語を構成する。しかし、その属性叙述は類似性を示すものが多く、「な」を伴い連体修飾語となることが多い。ただし、人や物を表す名詞としても使えるのが特徴的である。

一方、「風」は節構成になると、意味が変わる。一つには「様子・素振り」という意味を持ち、自由に格助詞を伴う名詞節を構成することができる。ただし、この場合でも、「風」は完全に自立語になるわけではなく、必ず「具体的な内容」を説明する連体修飾節を要求する。もう一つには、形式名詞の「風」

と違い、「風な・に・だ」という助動詞の用法が生まれるのであるという点がある。「風な・に・だ」全体が後接する語の様態を示すものとなるのである。「な・に・だ」それぞれ統語的な機能を異にする活用である。つまり、「風だ」は形式名詞から様態を示す助動詞へと変わっていることがわかる。ただし、その変化は節構成の内部における変化であり、語構成における「一風」の意味と繋がりがあがる（同じ人の特徴を表すと言える）ものの、複合語の場合には前接部分は体言しかないのに対して、節「X風」の「X」部分は名詞句だけでなく、動詞句・形容動詞句・ような句など質が全く異なるものが見られる。従って、様態を示す助動詞「風だ」は形式名詞「風」の意味が抽象化することに伴う変化であり、語構成における「一風」とは直接関係しないと言える。ただ、「名詞句＋という＋風の＋N」という例もあり、字音形態素「一風」は直接名詞句につく用法から「という」の介入がある節の用法へと変わる側面もあることがわかる。

5.2 名詞的要素「式」と助動詞「風だ」の違い

「式」は「どのような（様式）」の中の「どのような」という部分を内容引用することで、語構成および節構成両方に参加する。「日本式」を除き、「形態素・語・文相当句・という句・動詞句」のいずれにおいても、「式」の前接部分を一つの様式の内容とする点が語構成と節構成の接点であり、ある範囲（一文）での内容引用は語構成においても、節構成においても共通する。言い換えれば、前接部分の統語的な形式の違いに関係せず、「式」はそれを一つの様式の内容として取り上げるという機能を持つ。前接部分は直接名詞の属性を叙述することができず、「式」の内容説明として取り上げられることから、物を表す名詞の属性を叙述するものとなる。それは、「様式」という属性叙述をする機能が最も重要であるためである。

一方、「風」は語構成においてすでに前接部分の意味に頼る「特徴」という意味しか持たない。ただ、「一風」は名詞的な意味を持つ形態素（体言類）である。「風」が助動詞へと動くことは形態素「一風」と直結するところがなく、最も重要な要因は形式名詞としての「風」の意味が薄まることである。さらに、「X風」節自体は名詞と共通する連体修飾用法だけでなく、名詞節が持たない属性（様態）を限定する連用修飾用法を獲得することも一つの重要な転機であると言える。それによって、「な・だ」だけではなく、「に」という活用を

獲得し、「な・に・だ」という活用システムを完全に構築するのである。その結果、「風」は「だ」と一体化し、様態を示す助動詞「風だ」へと変わったのであろう。

5.3 語構成と節構成の接点

「式・風」の語構成と節構成における分析から語構成と節構成は連続していると言える。

「風」のように、語（形式名詞）として自立してから助動詞へと変化する場合もあれば、「式」のように、属性叙述する意味をもち語構成と節構成両方に参加する場合もある。

助動詞が構成する節が連体修飾節と文末になる際には、属性叙述をする名詞節の機能と高い類似性を持つ。それは、語レベルにおける形容動詞と名詞の属性叙述の類似性と同じである。

「日本式・日本風」のような、「日本特有の様式」という語としてのまとまり特有の意味を持つ複合語は語構成レベルでしかできないが、「機械式・回転式」のような、「機械という様式・回転という様式」という単純に前接部分の内容を引用し、一つのタイプにする場合、語構成レベルでしかできない意味的な特殊性がなくなるのであって、それを統語的に補完すれば、そのまま節へと変わることが推測される。それによって、「式」の前接部分がより統語的で、具体的な句へと拡張することが可能となるのである。山下（2011）では、このような現象を文法化とするが、本稿の考察からすると、「式」自体の意味やそれが構成する複合語・節の意味と機能とは基本的に同じであることから、「式」の意味的稀薄化は見られず、文法化とは言えないことがわかる。

語レベルでは名詞と形容動詞はそれ以上分けられないが、節構成においては「句+助動詞」と「句+形式名詞」では助動詞と形式名詞との独立性が異なるのである。つまり、「句+助動詞」節は形容動詞と同じで、「句+形式名詞」は属性叙述する名詞と同じ統語的な振る舞いをするのである。

6 まとめと今後の課題

本稿は、「式・風」が構成する複合語と節の共通性と相違とを考察した。「一式・一風」が構成する複合語は名詞であるが、連体修飾語になりやすい。それと同時に、「式」と一部の「風」が構成する名詞節も連体修飾節になりやすい

ことが明らかになった。「式・風」は連体修飾語と連体修飾節を構成できる形式的なものであることが分かった。その点は一般的に自立語になる過程を経由する名詞とは異なる。ただ、内容説明である「ようだ」のような助動詞にもなりきれないのに、形式名詞と共通する機能を持つ「式」と一部の「風」の特殊性はどのような意味合いを持つのかについてはまだ明らかになっていない。また、「性」のような連体修飾語になりやすい複合語を形成する語構成要素でありながら節を構成することができないものもあるし、「感」のように節を構成することはできるが、連体修飾節を構成できないものもある。このような複合語を構成する字音形態素になぜ節を構成するものと構成しないものが存在するのか、そして、なぜ連体修飾節を構成するものと連体修飾節を構成しないものが存在するのかという点を含めて、今後の課題としたい。

参考文献

- 青木博史 (2016) 「語から句への拡張と収縮」『文法と語彙への統合的アプローチ 日英対照 生成文法・認知言語学と日本語学』藤田耕司・西村義樹 (編) pp.408-422、開拓社
- 荒川清秀 (1986) 「～性 ～式 ～風」『日本語学』05-03、pp.85-91、明治書院
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎 (1997) 『岩波講座 言語の科学 3 単語と辞書』岩波書店
- 新屋映子 (2014) 『日本語の名詞指向性の研究』ひつじ書房
- 西山祐司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房
- 野村雅昭 (1978) 「接辞性辞音語基の性格」『国立国語研究所報告 61 電子計算機による国語研究IX』、pp.102-138、秀英出版
- 村木新次郎 (1998) 「名詞と形容詞の境界」『言語』27(3)、pp.44-49
- 村木新次郎 (2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房
- 山下喜代 (1997) 「字音形態素「～式」の機能」『青山語文』27、pp.167-179
- 山下喜代 (2005) 「漢語と文体—漢語接尾辞を含む合成語と引用表現を中心に—」『表現と文体』(中村明, 野村雅昭, 佐久間まゆみ, 小宮千鶴子編)、pp.87-97、明治書院
- 山下喜代 (2011) 「字音接尾辞「式・風・的」の意味—プロトタイプとスキーマ—」『青山語文』41、pp.130-142

A study of the Chinese affix *Shiki* • *Fu* from the perspective of the relevance between word formation and sentence formation

Rui ZENG

This article examines the differences and similarities of the usage of the Chinese affix *Shiki* • *Fu* in word formation and sentence formation. After a thorough examination, the article points out the relatedness between word formation and sentence formation.

The examination concerns the following two aspects:

1. whether *Shiki* • *Fu* forms noun stem or adjective stem.
2. whether *Shiki* • *Fu* are words or not in sentences.

The article comes to the following conclusions:

1. After a thorough examination of the syntactic features of *Shiki* • *Fu*, we see that *Shiki* • *Fu* can be used as nouns, but they express type, so most of the time they are used as modifier of a non-inflectable word.

2. *shiki* can not stand as a word, but it can form a noun sentence the same as a formal noun. The noun sentence it forms can only be used as attributive or predicate which is similar to the word it forms. *Fu* forms formal nouns and auxiliary verbs. It is related to *Fu* in word formation, but has no direct connection.

From the word formation and sentence formation of *Shiki* • *Fu*, we can see the similarity of between the attributive sentence & predicate sentence formed by auxiliary verbs and noun sentence formed by formal nouns. This is the same as noun root and adjective root that express attribute.